



映画雑感 18

柴生田 晴四

(経済倶楽部理事長)

▼「劇場版ラジエーションハウス」は人気TVドラマの映画版。正体不明の感染症に立ち向かうためあえてリスクを冒す検査チームの姿にコロナ感染を怖れて患者の来院を拒む医療を思い出しました。

▼「ツユクサ」はひなびた港町を舞台に過去の事情を抱えながらも明るく毎日を過ごす五〇歳の女性に訪れる小さな奇跡が描かれます。小林聡美や松重豊など芸達者な俳優陣を得て

嫌味のない小品に仕上がりました。

▼「マイ・スモール・ランド」は突然在留資格を失ったクルド難民の少女の苦難の日々が始まります。厳しい日本の難民政策の理不尽が少女の身に襲いかかる現実がリアルに描かれます。ウクライナ難民のみを特別扱いして国際アビーに余念のない政府とそれに迎合するメディア関係者に見てもらいたい映画です。

五カ国のマルチルーツを持つ嵐莉菜が一七歳のヒロインを見事に造形。娘の幸福を願う父親の選択が、平和呆けの日本人を撃ちます。

▼「流浪の月」は2020年度本屋大賞を受賞した同名小説の映画化作品。力作ですが、ヒロインの元恋人がストーカーと化す下りか前面に出すぎたことで映画としてのバランス

が崩れ、肝心の主人公二人の社会の理不尽に向き合う覚悟がいささかぼやけてしまったように感じました。

▼「シン・ウルトラマン」は「シン・ゴジラ」をヒットさせた庵野秀明と樋口真嗣のコンビが手掛けた特撮ヒーローのリメイク第二弾。ウルトラマンがなぜ地球に出現したのか。映画は人類の存在そのものを問うものに発展していきます。斎藤工がカメレオン俳優の面目通りの活躍を見せます。

▼俳優の水谷豊が監督を務めた「太陽とボレロ」は資金難から解散目前の市民オーケストラが最後の演奏会を実現させるまでを描きます。冒頭若手団員二人が駆け付けた一流楽団の演奏で映画は幕を開けますが、西本智美の

指揮が実に見事。トラブルを乗り越えて大団円にたどり着きますが、そうなるかなと秘かに期待した結末に出会えて満足しました。

▼七五歳を越えると安楽死を選択できる法律が制定された近未来の日本。「PLAN75」は、失職した末にこの制度を申請する女性や申請窓口の市職員などの日常を淡々と描き、生と死の問題に向き合う時間を与えてくれました。倍賞千恵子の存在感はさすがです。

▼「メタモルフォーゼの縁側」は一人暮らしの七五歳の老婦人と一七歳の女子高生とがボーイズラブ漫画を通して親友になっていくおはなしです。かつて祖母と孫娘の役で共演したことのある宮本信子と菅田愛菜が息の合った演技で楽しませてくれました。